

自分自身への気付きの深まり」にせまる評価（見取り）の在り方

生活科研究会議

研修員 國武 和美（川崎市立新城小学校） 島田美奈子（川崎市立東柿生小学校）
田辺久美子（川崎市立京町小学校） 大野 恵美（川崎市立鷺沼小学校）
指導主事 葉倉 朋子

主題設定の理由

平成元年の学習指導要領の改訂において、小学校低学年に生活科が新設され、今回初めての改訂を迎えた。今回の改訂は完全学校週五日制の下、各学校が「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開し、児童に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を図ることを基本的なねらいとして行ったものである。生活科においては、具体的な活動や体験を一層重視することが強調され、また、これまで2学年で行うことになっていた合計12項目の内容を8項目に厳選した。さらに、各学校が地域や児童の実態に応じて、2年間を見通した指導計画を作成することが可能となっている。

この10年間の生活科の現状を考えると、子どもたちは、思いや願いをもって学習活動を展開する中で地域に目を向け、様々な場で多様な人とふれあう機会が増えてきている。さらに、そのかわりの中で、徐々に集団における自分の存在に気付き、自分のよさや成長にも気付くことができるようになってきた。このことは、生活科が、「生きる力」につながる「具体的な活動や体験」と「学び」との結び付きに、大きな影響を与えていることが分かる。このことは、生活科の大きな成果と言えるであろう。

一方、様々な成果を挙げてきている生活科の中に、新たな課題も生まれてきた。それは、生活科においては活動が重視されるため、子どもが活動を楽しむ姿に目が奪われ、その活動の中で育成するものが曖昧になりやすいということである。また、工夫された活動や体験の中で、子どもは様々な気付きをしているが、子どもの活動が多様になればなるほど、教師が子どもたちの気付きを見落としがちになるということもある。多様な学習活動が生まれる中で、子どもの気付きをどのように見取り、その気付きを深めていけるか、という課題が出てきている。

そのような点を踏まえ、平成13年度センター生活科研究会議では、人とかかわりを重視した学習の中で自分自身への気付きを深めるということに焦点を当て、教師の支援の在り方を明らかにしていくための研究を行った。そこでは、学習活動の中で人とかかわることと自分自身への気付きを結び付けていくことで、気付きの深まりがあることがとらえられた。しかし、気付きの深まりを見取ることやより気付きを深めていく支援については課題が残った。

そこで、今年度は、自分自身への気付きの深まりにせまる評価の在り方に焦点を当て、次のような研究主題を設定した。

（研究主題）

「自分自身への気付きの深まり」にせまる評価（見取り）の在り方

研究の内容

1. 研究の仮説

上記の研究主題をもとに、仮説を次のように設定した。

生活科の学習の中で、気付きを見取る視点をもつことにより、「自分自身への気付きの深まり」にせまる評価が明らかになるであろう。

2. 自分自身への気付きの深まりについて

(1) 自分自身への気付き

子どもは、自分を中心として、身近な人、社会、自然との関係の中で、かかわり合い高め合いながら気付きを深めていく。そして、直接かかわる中での気付きとともに、そこに映し出される自分自身や自分の生活について気付いていくことができるようになる。学習指導要領解説生活編の中では、自分自身への気付きとして、「集団における自分の存在に気付く」「自分のよさや得意としていることに気付く」「自分の心身の成長に気付く」の3つを挙げている。自分自身への気付きとは、人、もののかかわりの中で気付く自分のよさであり、自分の思いや願いを達成した時に気付く自分の姿であろう。

それは、活動を通して、人やものと十分なかかわりをもつ中で、活動を振り返り、自己と向き合い、自己の姿や自己の在るべき姿を認識することであると考え。例えば、自分の内面のよさや外側から見えるよさに気付いた時などに、その姿は見られるであろう。これらの気付きを子どもが自覚できるように、教師による的確な場や言葉掛けなどの支援が重要になってくる。

そこで、自分自身への気付きを深めるために、気付きを見取る視点をもって授業を展開することにした。

(2) 気付きを見取る視点

子どもが、自分自身への気付きを深めるためには、学習活動中での気付きを子ども自身が自覚しそのよさや価値を感じ取ることが必要だと考える。子どもたちは、学習活動の中で多くのことを発し、新たな気付きをしているが、その気付きは活動の広がりの中で見落とされがちである。

そこで、まず、教師がその気付きを的確に見取ることが必要になる。そして、それらのもつ価値を理解すること、その思いに共感することとともに、その気付きを子どもに返していき、子ども自身にそのよさや価値を実感させることが重要になる。そのために、気付きをただ漠然と見ていくだけでなく、それぞれの子どもに応じて、いくつかの視点をもち具体的に見取っていくことが必要だと考えた。

本年度、川崎市総合教育センターで実施された生活科研修講座の講師（東京学芸大学附属世田谷小学校 鎌田和宏教諭）の助言を基に、研究会議の研修員の今までの実践から知的な気付きを出し合い、次の6つの視点を挙げ、その視点で自分自身への気付きを見取っていくことにした。

- ・ 興味・関心(自分が興味・関心をもっているものへの気付き)
- ・ 思い・願い(自分の思い・願いへの気付き)
- ・ 見方・考え方(物事に対しての自分の見方・考え方への気付き)
- ・ 調べ方・表し方(自分の調べ方・表し方への気付き)
- ・ 仲間とのかかわり(集団の中での自分の存在への気付き、友だちの存在への気付き)
- ・ 振り返りの傾向(自分自身を見つめることへの気付き)

この視点は、単元によって、また、授業のねらいや活動内容によっても重点の置き方が変わってくる。しかし、気付きの視点を定め、継続的にその気付きを見取ることで個々の子どもの伸びやつまずきが見え、そこからより適切な支援が生まれると考えた。

そこで、本研究会議では、「気付きを見取る視点と自分自身への気付き」について図1のような構想図を作成した。生活科の学習は、人やものと自分とのかかわりを中心として展開される。そのためには、気付きを自覚できるようなかかわりの場を設定することが重要になる。そのかかわりの中で、6つの視点で気付きを「見取り」、その価値や意義を子どもに「返す」という支援を繰り返すことで、子どもの気付きが深まるとともに、自己肯定感、既存感情も生まれてくると考えた。自分の成長、自分のよさ、集団における自分の存在に気付くことは、次への期待と意欲を育てることにつながり、生活科の究極的な目標である自立への基礎を養う上でも重要である。このことは、「生きる力」の育成にもつながっていくものと考えられる。

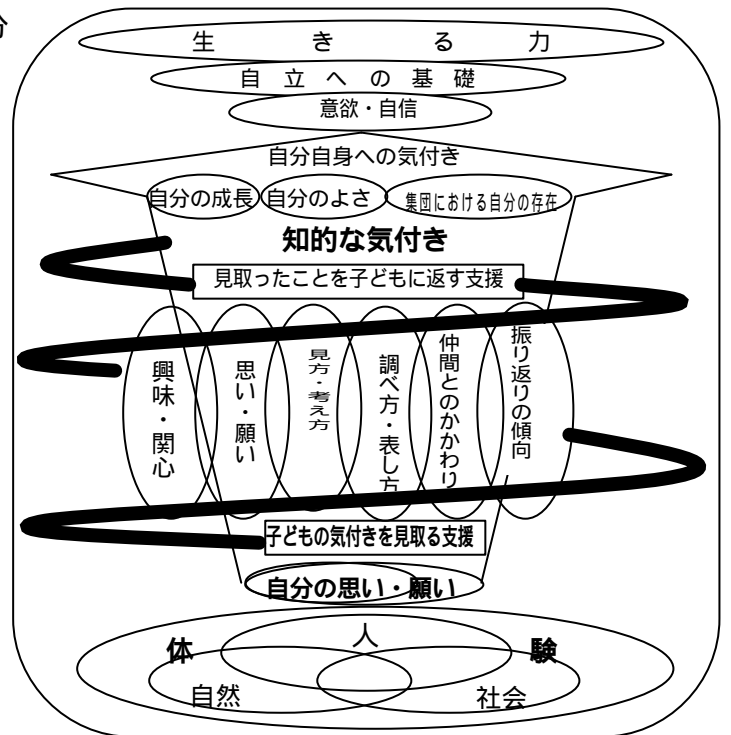


図1 気付きを見取る視点と自分自身への気付き

3. 検証授業

単元名 2年3組 「生きものワールド」 (10時間)

単元目標 生き物を飼い、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心を持ち、また、生き物が生命をもっていることや成長していることに気付き、親しみをもつとともに大切にすることができるようになる。 <(7)の内容>

(1) 検証授業のねらい

活動の中で気付きを自覚するために、次のような活動の設定をし、自分自身への気付きが深まる様子を分析する。

長期間にわたって世話をする活動(繰り返し世話をする活動の設定)

世話を交換する活動(新たな人やものとかかわりがもてる活動の設定)

友だちと共に世話をしたり情報を交換したりする活動(人とかかわり合う活動の設定)

(2) 活動の流れ

この単元は、1年の1学期、学校探検で6年生の教室でハムスター、メダカ、カメ、インコなどを見つけ、「自分たちも何か生き物を飼いたい」という子どもの願いをきっかけにして生まれた。1年生の1学期の終わりに教室でハムスターが飼われるようになり、6年生の教室で飼われていたカメを譲り受けたりしながら、金魚やカブト虫の幼虫、子ども達が捕ってきた虫などが飼われ始めた。様々な生き物とのかかわりの中で、子どもたちは、困ったことがあると6年生に聞きに行ったり自分たちで話し合ったりしながら、育て続けてきている。今回は、その中で「クラスに生き物ワードをつくろう」という学習活動を展開した。

(3) 本単元における気付きを見取る具体的な視点

興味・関心	自分が興味・感心をもっている生き物への気付き
思い・願い	自分がどんなことを友だちにたずねたいのかへの気付き 自分が生き物に対してもっている気持ちへの気付き
見方・考え方	自分が生き物についてとらえている見方や考え方への気付き
調べ方・表し方	自分が知りたいことの調べ方への気付き
仲間とのかかわり	友だちの中での自分のよさや存在への気付き 友だちのよさや存在への気付き
振り返りの傾向	自分の心身の成長への気付き

(4) 学習活動における見取りと支援の分析

< A児 >

長期間にわたって世話をする活動

世話を交換する活動

本時では、生き物の世話を交換する活動を行うことで、自分が世話をしていた生き物以外にも関心をもち、親しみをもつことができるようになることがねらいである。はじめ、世話の交換をする生き物が決まらないA児だったので、今、世話をしている生き物の世話の仕方を友だちに教えることによって自信をつけてもらいたいとの願いをもち、担任からそのまま金魚の世話を勧めた。本時を中心に、その前後のA児の変化をまとめた。

Tは支援

	興味・関心に対して	調べ方・表し方に対して	仲間とのかかわり
「気付きの見取り」と支援	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>生き物にあまり関心がなく、何の世話をしてもよいのが決まらなかった。</u> (本時前) <p>T 釣りに行った話を聞いて、<u>魚の世話をすることを勧めること</u>で生き物に目を向けさせた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>金魚をきっかけに、次第にいろいろな魚に興味をもち、本で調べたり水族館に行ったりして、自宅でも何種類かの魚を飼うようになった。</u> (本時前) <p>本時：飼っていた生き物の世話の交換をしよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>自分が調べたことを人に教えることができるようになった。</u> (本時) <p>T <u>こんなにいるんなことを知っているなんて魚博士だね。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>魚への漢字を辞書で調べ、クイズを作ってきて友だちに問題を出していた。</u> (本時後) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>生き物の世話に関してもとつても引込み思案であった。</u> ・ <u>グループでの世話の時間はリーダーに言われたことを一生懸命に行っている。</u> (本時前) ・ <u>事あるごとに友だちから「さすが、魚博士」と言われるようになった。</u> (本時前) ・ <u>世話の交換の時、もとの金魚の担当が自分だけになり、とまどっていた。</u> (本時) <p>T <u>みんな、金魚の世話がはじめてだから、博士、よろしくね。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>友だちが世話をした後から見守り、失敗しそうな時や質問させた時に声を掛けていた。</u> (本時)
その後の気付きの深まり	<p>国語の「あったらいいなこんなもの」のスピーチでは、<u>金魚の水槽に入っ</u>て話ができる「<u>えら薬</u>」について発表した。<u>生活や学習のすべてが魚に結び付き、後半は魚が大好きである</u>と言うようになった。</p>	<p>漠然と本や図鑑をながめることが好きだった様子から、<u>調べたいことははっきりもって図鑑や飼育の本を見るようになった。</u></p>	<p>友だちから「<u>すごいね</u>」と言われると、<u>にこにこしてとてもうれしそうであった。</u>「<u>水の量はあと3センチ位</u>」「<u>この水槽の大きさと4粒位(薬の量)</u>」などと、<u>具体的に友だちに教えることができていた。</u></p>

< 考察 >

興味や関心の在り所がはっきりしていなかったA児であったが、子どもとの日常の会話の中で「魚釣りに行った」ということを耳にした教師による「魚の世話」の勧めから、興味や関心の在り所が広がっていった。さらに、本時では、飼っていた生き物の世話の交換から、教わる立場から教える立場へと立場が転換した。教師が、子どもの「調べ方」や「仲間とのかかわり」に気付きの見取りの視点をもつことで、調べたことを誉めたり、「博士」と呼ぶことで友だちに教えることを促したりする支援を行うことができた。このことは、A児にとって、集団の中の自分の存在価値を認識することや、次の新たな活動を生み出す自身につながっていったようである。

< B児 >

長期間にわたって世話をする活動

友だちと共に世話をしたり情報を交換したりする活動

家庭でもハムスターを飼う経験があり，学校に自分の家のハムスターを持ってきた。中心となって世話をしたい思いが強く，何事にも友だちと協力することが少なかったので，世話の交換を通して，友達や生き物に対する見方や接し方が変わって欲しいとの願いをもった。その自己関与意識や成功感を通して，仲間意識や帰属意識が育って欲しいと考えた。本時を中心にその前後の B 児の変化をまとめた。

	思いや願いに対して	見方や考え方に対して	仲間とのかかわりに対して
「気付きの見取り」と支援	<ul style="list-style-type: none"> 自分から餌や砂を学校に持ってきたり，自分から餌入れや家を作ったりした。 読書の時間に，ハムスターの世話の本をよく読むようになった。 (本時前) かごが小さくて可愛そうだといって広いかごを希望する。ペットボトルで遊び場を作っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の家から持ってきたハムスターをかわいがりよく声をかけている。(本時前) TBさんはよく声を掛けているね。大好きなのね。 ハムスターが行方不明になり，心配して，捜すためのポスターを描く。(本時前) みんなも心配して手伝ってくれたね。 	<ul style="list-style-type: none"> ハムスターの持ち主でもあり，何事も中心になって世話をしたい気持ちが強い。 ショッパー以外のハムスターをおもちゃの電車のように持って友だちに非難された。 でもね。Bさんはいつもどのハムスターにも餌をやったりかごを片付けたりしているよ。 はっとしたように黙り，その後どのハムスターにも優しくなった。 ハムスターのポスター作りを友だちも手伝ってくれる。
	<p>本時：友だちと飼っていた生き物の情報を交換しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 交換せず，真っ先にハムスターの世話に行く。(本時) ハムスターの結婚式の計画を思い付き，友だちと相談しポスターに描いたりクラスで発表したりした。 T友だちに手伝って欲しいことを声掛けしたことをほめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 担当が友達のよさを見つけた子をほめた後，じっと考え込み，「他の動物もかわいいのかな。私も他の生き物の世話もやりたい」と発言する。(本時) 	<ul style="list-style-type: none"> さんの餌入れの洗い方が上手だったよ」と友だちのよい点を見付ける。 友だちのよい所に気付いてえらいね。 世話を友だちに任せる場面が見られるようになった。
その後の気付きの深まり	<p>ただ，世話をするだけであったが，次第に本で調べた世話の仕方を試みるようになっていった。ハムスターの赤ちゃんを誕生させるにはどうしたらよいのか，寒くて震えているハムスターの世話はどのようにしたらよいのかなど，可愛いと思う気持ちから生命としての存在への気付きへの深まりへと活動に広がりを見せた。</p>	<p>自分のハムスターの世話だけに思いが集中していたが，友達とかかわることを通して，次第に他の生き物の世話もしてみたいと思うようになっていった。ハムスターとの違いを比べてみたいという生き物への見方や考え方が広がり，活動の広がりが感じられた。</p>	<p>自分一人で世話をするより，友達と一緒に世話をした方が楽しいということに気付いていった。友だちのよい点を見付けたり，友だちにハムスターの世話をある程度任せたりできるようになっていった。</p>

< 考察 >

自分の思いが先に立ち，友達の存在や気持ちを考えて行動できないことの多いB児だったが，長期間にわたって生き物を世話をする活動を設定したことや世話の仕方の情報交換等を通して，他の「生き物の見方」が変わったことや自分の思いだけではうまく世話ができないことに気付いていった。A児の「思いや願いへの気付き」を，教師が時間をかけて見取っていき，友達とかかわるような声掛けをしていったことで，自分自身の行動を振り返る機会もできていった。また，自分のハムスターだけ

を可愛がる点を指摘された時に、「でもね」と教師がB児のよさを友達に伝えたことで、認められている自分に気付いていく様子が見られた。認められた喜びは、その後、友達を認める心につながっていく。自分のよさに気付くことは、人との信頼関係を生んでいくと考える。

研究のまとめ

1. 研究のまとめ

気付きを見取る視点の有効性

自分自身への気付きを見取るために視点を定めたことは、子どもの活動を意識的に見つめ、気付きをとらえるのに非常に有効であった。また、それぞれの子どもに添った気付きの視点を重点化することで、その子どもの特性に合った気付きの深まりを継続的に追っていくことができた。しかし、この6つの気付きの視点は単独に存在するものではなく、互いに関連するものが多いことも分かった。視点を決めることは重要ではあるが、互いに関連し、かかわり合いながら気付きが深まっていくことを認識しながら、支援していく必要がある。

気付きの深まりにおけるかかわりの重要性

子どもの気付きを引き出すためには、人やものとかかわる場が重要である。人やものとかかわりは、新たな気付きを生むことになり、さらに、その気付きは友だちからほめられたり認められたりすることで、深まったり広がったりしていく。つまり、教師は、気付きの視点をもとに見取った子どもの姿から、その言葉や行動の背景にあるものを見取り、価値付けたり意味付けたりする支援を行っていくことが重要になる。さらに、気付きをその子どもの中でどうつなげていくか、教師のかかわり方が重要になる。

2. 今後の課題

今後の課題として、次のようなことが挙げられる。

- ・気付きの視点を基にした実践を重ね、気付きの深まりにせまるためのより有効な見取りについて研究していく必要がある。
- ・見取りの視点を、具体的な子どもの姿を基に検討していく必要がある。

最後に、本研究を進めるにあたり適切なお助言をいただきました先生方、研究にご支援、ご助言を下さいました校長先生、学校教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|--------------------------------|-------|
| 『小学校学習指導要領解説 - 生活編 - 』文部省 | 1999年 |
| 嶋野道弘編著『小学校学習指導要領の展開 生活科編』 明治図書 | 1999年 |
| 嶋野道弘編著『小学校 生活科・総合的な学習』 東洋館出版社 | 2002年 |

【指導助言者】

- | | |
|----------------------------|------|
| 川崎市立小学校生活科研究会長（川崎市立有馬小学校長） | 森 尚子 |
| 川崎市教育委員会学校教育部指導主事 | 川崎 等 |